

β 遮断薬の使い方④

(ファースト・チョイス)

1. β 遮断薬をファースト・チョイスとすべきなのはどのような症例か。

- ① 高血圧で心不全、頻脈、狭心症を合併している。
- ② 心筋梗塞後
- ③ 安定労作性狭心症があり冠動脈インターベンションが行えない場合。
- ④ 頻脈性心房細動
- ⑤ 心不全

2. 心不全に対して、β 遮断薬を投与すると一時的に心機能の悪化をみる症例を経験するが、それを避ける方法。

- ① 心不全に使い始めるときは、通常高血圧などで使う量の1/8ぐらいの量から始める。
- ② β 遮断薬の種類によって、心機能を低下させる作用が弱いβ 遮断薬（カルベジロール）と強いβ 遮断薬（ビソプロロール）とがあるので、心機能の低下を最小限にとどめたい場合にはカルベジロールを使う。
- ③ 心機能が低下していて（特にBNPが500を超える場合）血圧が非常に高い場合には、β 遮断薬を初期量使いながら一緒にARBか、あるいはCa拮抗薬を初期量から使っていく。

3. 虚血性心疾患の中ではどのような症例に投与すべきか。

- ① 特に労作性狭心症の症状があつて、脈拍が早いあるいは血圧が高い症例。
- ② 心筋梗塞の既往のある症例。
- ③ 心機能の低下がある症例。
- ④ 心室性不整脈が出ている症例。
特に脂溶性 β 遮断薬（カルベジロールあるいはビソプロロール）は心室性不整脈を予防する効果が強い。

4. 心房細動にはどの β 遮断薬が有効か。

心房細動に対しても β 遮断薬は非常に有用でガイドラインでも初期から使えとなっているが、 β_1 選択性の遮断薬とくにビソプロロールが有用である。

5. 高齢者、腎機能低下者に対して投与する際の注意点は。

- ① 特に肺気腫などが隠れているケースでは β_1 選択性遮断薬（ビソプロロール）を選択する。
- ② 非選択性の β 遮断薬は腎機能を悪くされている。

腎機能低下を来たしている場合はカルベジロールの方がどちらかというとなビソプロロールよりも腎機能低下作用が若干少ないので、カルベジロールを選択する。